

行政情報

Administrative Information

#01

疏水サミット in 北海道2008 水士が里をつくり里は水土をまもる

疏水サミット in 北海道2008実行委員会

当実行委員会では、札幌市などにおいて「^{そすい}疏水サミット in 北海道2008」を開催、全国から関係者や一般市民など約750名（フォーラム）が参加しました。疏水サミットは、^{そすい}疏水^{*1}の保全活動に関する情報交換を行うとともに、疏水の価値や役割を広く国民に理解してもらうために毎年開催されているもので、一昨年の青森県、昨年の石川県に続き第3回目となるものです。本稿では、平成20年6月4日に行われたフォーラムの一部についてご紹介します。

基調講演

後世への最大遺物，^{みどり}水土里



長澤 徹明 氏
北海道大学大学院教授

内村鑑三の思想

長澤 最近、私は、中村哲というお医者さんが書いた本（「医者、用水路を拓く」）にたいへん感銘を受けました。この先生は、20年ほど前からパキスタンで医療活動に従事し、最近5年ほどはアフガニスタンにおいて農業用水路の建設に奮闘している方です。先生はこの本の中で「飢餓とそれから渇水を前に医療人というのはあまりにも無力で辛い。清潔な飲料水と十分な農業生産があれば、病の多くは防ぎ得るものであった。私たちは“百の診療所よりも一本の用水路を”、そういったことを合い言葉に、体当たりでこの事業に^{まいしん}邁進してきた」と述懐されています。

先生が、現地の日本人ボランティアに、まず読みなさいと薦めたのが、内村鑑三の著書「後世への最大遺物」です。内村鑑三は、明治14年に札幌農学校を卒業した、現在においても影響力を持っている思想家です。内村が、明治27年に箱根でこの表題の講演をした中で、「我々はこの美しい地球、美しい国土、日本に生まれ育って、そしてそのまま何もしないで逝ってしまうのは残念である。何か後世に大事なものを遺していくべきである」という話から出発して、では何が遺せるかと幾つかその項目を挙げています。その一つとして、事業、特に土木事業を挙げ、これを遺すべきであるといっています。そこで深良用水、現在の箱根用水のほか、大阪、京都などのさまざまな疏水を取り上げ、こういった土木事業は実に後世に遺すべき素晴らしいものであるということを力説しているのです。

※1 疏水：農業に関係する通水機能を有する水源また末端までの一連の水利システム。農業用排水路等の施設。

北海道開拓の歴史と三つの疏水^{※2}

北海道の開拓は、明治の政策に伴って行われました。明治2年に置かれた開拓使の基本方針は有畜畑作農業。水田は当面はやらない、畑作でいこうということになったわけです。その後、明治15年に開拓使が廃止され、そのころから、民間の農家の方々が水田をなんとかして作りたいと熱意を持って取り組むようなことが発生してきます。その後、本格的に水田奨励の方針に移り、水田はどんどん拡大していくことになりました。

第2次世界大戦後は、緊急開拓事業により農地開発が盛んに行われた時代でした。昭和24年には土地改良法ができ、土地改良区が設立されました。農業土木とか土地改良が脚光を浴び、大いに活躍した時代だったと思います。道内でも篠津運河の開削や、根釧原野の大開発というようなことが、次々と実現していきます。

こういったことから、水田の面積は最大時28万haぐらいにまで増大しました。その結果、水利施設がたくさん出来上がり、北海幹線用水路のような1万6,500haの水田に水を供給する大施設ができたり、また、石狩川の下流では、篠津運河を通じて7,000haの農地に水を供給している。篠津運河はたいへんユニークな存在で、当初は用排水兼用、物資の輸送も狙いがあった、たいへん重要な基幹施設として存在しています。

それから、私は旭川で育った人間ですので、聖台貯水池はたいへん親しみのある存在です。この辺りは、明治の初めごろに皇室の御料地として設定され、その後、皇室から払い下げられ、「聖台」という名称になって、昭和12年には聖台貯水池が完成する。そして現在に至っているわけですが、特筆すべきは、ここは当時



北海幹線用水路

※2 三つの疏水：疏水を保全する国民運動の一環として、平成18年に疏水百選が選定され、北海道からは「北海幹線用水」「篠津中央篠津運河用水」及び「旭川聖台用水」の3つが選ばれている。
<http://www.inakajin.or.jp/sosui/index.html>

の技術の粋を集めて造られたもので、その技術的な遺産は現在の寒地土木研究所の礎になったのだそうです。この聖台用水によって、1,050haの水田が開かれました。

北海道農業はたゆまぬ基盤整備の賜物

北海道は、食料生産量では国内最大の地位を確立しています。平成18年度の食料自給率は195%です。北海道民が約570万人ですから、1,000万人分ぐらいの食料を生産しています。これは、この百数十年の間、さまざまな自然環境を改良に次ぐ改良で克服してきた、そういったことの賜物ではないかと私は理解しています。国内だけに限らず、外国の寒冷な地域でも、我々が培ってきたこの技術を大いに活用できる、そういった農村空間創出のモデルとなり得ているのではないかと思います。

パネルディスカッション



コーディネーター
梅田 安治 氏
農村空間研究所長、
北海道大学名誉教授

梅田 本日のフォーラムは、「水土が里をつくり 里は水土をまもる」をテーマとしましたが、ここで何か無理に結論を得ようとかいうことではありません。話の中から、ご来場の皆さんに疏水についていろいろと考えていただければ最高だと考えています。

農村の活性化は地域主体の取組から



パネリスト
野本 健 氏
財北海道農業近代化技術研究センター
農業農村環境研究所長

野本 昨年度から農地・水・環境保全向上対策が始まりました。この趣旨としては、農業者だけでは農業施設の維持や景観・環境の保全が立ち行かなくなっていくといった状況を踏まえ、地域住民・組織と一体となって、集落機能を活性化していこうということだと思いますが、実際にこの1年間を見ても、どうも定番的な取組が多い気がします。実際に地域再生の契機として主体的な活用がなされているのだろうか。

確かに（地域にはそれぞれ事情があり）難しい部分もあるかとは思いますが、ただ、最近はそれこそ地域の環境等、さまざまな要因が複雑になってきています。そんな中では、やはり地域が主体的に取り組むべきで

あると思います。これを契機とするかどうかによって、数年後の地域の有様には差がついてくるのではないかという気がします。今後は、住民が地域の夢を語り、地域の計画を作り、そして実施していくといったような取組がどんどん広がっていくことを期待しています。

「手自然」による新しい里山



パネリスト
草苺 健 氏
㈱北海道開発協会
開発調査総合研究所主任研究員

草苺 日本の農地は、西洋人にガーデンといわせるぐらい良く手入れされている一方で、林地の方はたいへん荒れています。そのため、人も入らなくなり、ごみも捨てられるという悪循環に陥ってしまいました。これをどうやって変えていけるか。農地と同じようなレベルまで林を手入れするということは、予算も人もかなり投入しない

とできない状態にあるわけですが、方法論としては、まず手入れをする。農業のように手の込んだ手入れを毎年毎年やっていくということは難しいかもしれませんが、別の価値観を投入するなどして手入れをしていくということが不可欠なのだということ、それを申し上げたい。

そして、手入れをしたところは、農地は農地で、林地は林地でそれぞれガーデンになっていく。それをどう表現すればよいのかを考えたのですが、コピーライターの糸井重里さんの「手自然」という言葉を使いたいと思っています。人の手が付いて、そして里山の匂いがする、そういうような自然。雑木林、カラマツ林、トドマツ林、全部条件が違いますので、いろいろなやり方で、各々が各々の立場で「手自然」に近づいていく。そうやって行き着く先というのが、きっと「イヤシロチ（弥盛地＝居るだけで元気になれるような空間）」的なもの。鬱で悩んでいる方がそこへ行くとか何とかとって元気になれる。実際にそういう現象がもう起きています。

梅田 「手自然」というのは、手入れをするということ。それは、ガーデン化するというよりも、ガーデン化したものを持続させる、持続のためのガーデン。持続ということにかなり意味がありますね。

草苺 そうですね。ターム（term：収穫の期間）は違いますが、農地も林地も同じようなことではないかなと思います。



パネリスト
高橋 慎 氏
栗山町ハサンベツ里山計画
実行委員会事務局長

農業技術伝承の場所が必要

高橋 農地・農村を守っていくという課題について、基盤整備等や生産性向上とか、安心・安全の農作物を作っていくとかは、生産者が頑張っていかなければならないことだと思います。また一方、環境配慮に係る部分などについては、都市の住民も一緒に担っていく必要が

あると思います。また、国なども環境をもう一度取り戻す配慮、財源的な担保が必要だというふうに感じています。こういったことを農家の人たちに委ねて、全てあなたたちがやりなさいということにはならないと思います。

梅田 高橋さんがお書きになったレジュメ（要約）の中に、農業の技術の伝承がという言葉があるのですが、その話をしていただけますか。

高橋 例えば、田んぼは水を張ってもだんだん抜けてきますよね。だから、夕方田んぼに行って水を入れて、朝行って水を止めて、そして太陽の光で温めるのだと。こういった作業をしないと、農業、水管理は成り立たない。用水も排水も川の堰もそのように造られている。それを今の人たちに伝えるということをしていきたい。機械で全てできるというようなことではない、物事の考え方の基本みたいな辺りを農業技術の伝達・伝承の「場所」にしたいと思っています。

梅田 なるほど。そういうことになった背景には、どうも農業土木技術にもある程度責任があるのかもしれませんがね。いろいろな農家の労力とか技術とかを、こちらの技術施設でもってどんどん代替えて、便利になっていった。その過程で、今いわれたような話を落としてしまったのかもしれないですね。

高橋（農業土木技術）ありがたいですよ。でも、1カ所や2カ所ぐらいは、そういったことを引き継いでいく場所がないと駄目かなと思っています。

我々が遺せる最大遺物とは

長澤 基調講演で最大遺物の話をしましたが、内村がいう、その最大のものは何かということをあえて申し上げませんでした。内村は、お金、その次に事業、それができない人は思想を遺せばよいといった。でも、それは万人にできるものではない。では何人にも遺すことのできる最大遺物は何か。それは個々人の「勇ましい高尚なる生涯である」というのです。

内村は、その例としていろいろな人を挙げています。例えば、皆さんよくご存じの二宮金次郎、二宮尊徳ですが、彼は農村社会の復興だとか、あるいは向上のために全力を尽くした人です。しかし、その成した仕事というのは、当時の日本の社会全体から見れば極々限られたものであった。しかし、彼がああ時代に志を立てて、非常な逆境の中で、後世に伝えられるような仕事、その記憶を遺した。まさしくこれが最大遺物であるというふうになっているわけです。

21世紀初頭にある我々が、この大事な（水土里の）遺産を将来に遺していこうと、そのためにこれだけの努力をしたと後世語り伝えられる。そのことこそが最大遺物であると、そういうふうに思います。



パネリスト
森 久美子 氏
作家、FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ

一般市民の「農業」の理解とは

森 私はラジオ番組をやらせていただいていますので、消費者のことを少しお話ししたいと思います。

例えば、一般の方に田んぼの中には暗渠あんきょというものが入っているという、ほとんどの方はうそでしょというのです。専門の皆さんは、そんな馬鹿なおっしゃるかもしれませんが、一般の方は食の安全には非常に興味があるのですが、土中だとか、取水だとか、排水だとかということに対しては興味がない。なんとなく、田んぼというのは、何もしなくても稲がとれるところだというふうに思っているのです。それは、農業を営み、守っている方たちにはたいへん失礼なことです。

安全・安心というのは、農薬がどうのというだけでなく、環境を守る、例えば、地下水を涵養かんようするということは、それだけ周りの環境も安全でなければならないというようなことに結びついている。安全なもの

を食べたいのだったら、自分たちの目で見たり、触れたり、消費者も一緒に成長しなければと常日頃思っています。

梅田 一般の人が暗渠排水を知らないという話、皆さん驚いたと思うのですが、私も頭から湯気が出るほど怒ったことがあります。稲の研究をしている人が、今の水田は昔からずっと水田だと思っていたのです。専門家ですえ人間がつくったものだと思っていな人がいる。

水は日本の環境をつくる

梅田 私たちの仕事である農業土木というのは、社会の底辺を支えてきているものだと思っていますが、こういう時代ですから、少し私たちのことをPRしたり理解していただくことが必要だと思います。そういう意味で、今回の疏水サミットは良いチャンスで、これを機会にやっていきたい。

私が30年ほど前に、国際水・水文研究10年計画というものに参加したときに国際的に要求されたことは、日本は乾燥地のことはよいから、水がいっぱいあるところの研究をしてくれといわれました。今日、またバーチャルウォーター（仮想水）の議論などが出てきています。しかし、私たちは、そこに引きずり込まれないで、今ある水、しかも地域を養っていく水、お米を作るためだけにやっているのではない、地域、日本の環境をつくるために、水をやっているのだ、ということが大事なのではないかと思います。